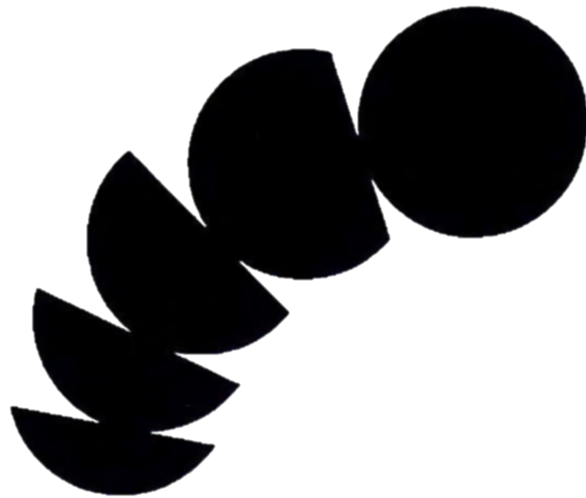


第 35 回テニス学会

The 35th CONFERENCE OF TENNIS SCIENCE

期 日 令和 5 年 12 月 9 日 (土) ~12 月 10 日 (日)

会 場 大同大学



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

主 催 日本テニス学会
後 援 大同大学
協 力 株式会社プレシャスワーク
株式会社ノアインドアステージ
株式会社 HEAD JAPAN
ミズノ株式会社
東海学園大学

(同支援内容内五十音順)

大会日程

12月8日(金)

18:00-19:20 運営委員会 大同大学

12月9日(土)

9:00 -	受付開始	X棟 2F
9:45 - 9:55	開会挨拶	X棟 0202 教室 (2F)
10:00-11:40	一般研究 (口頭発表①)	X棟 0202 教室 (2F)
11:40-13:00	ランチブレイク	
13:00-14:00	特別講演 1	X棟 0202 教室 (2F)
14:10-15:10	特別講演 2	X棟 0202 教室 (2F)
15:20-16:20	一般研究 (口頭発表②-A, ②-B)	X棟 0202 教室, 0203 教室 (2F)
16:20-17:00	総会	X棟 0202 教室 (2F)

12月10日(日)

9:00 -	受付開始	X棟 2F
9:30-10:30	一般研究 (口頭発表③)	X棟 0202 教室 (2F)
10:40-11:10	一般研究 (ポスター)	X棟 2F ラウンジ
11:20-12:20	テニス大会 (※)	テニスコート
12:30-12:35	表彰式	X棟 0202 教室 (2F)
12:35-12:40	閉会挨拶	X棟 0202 教室 (2F)

※雨天の場合テニス大会は中止になります。

昨年度に引き続き、今年度も学会大会主催の懇親会は不開催とさせていただきます。すでに懇親会費をお振込みされた場合は、当日返金いたします。

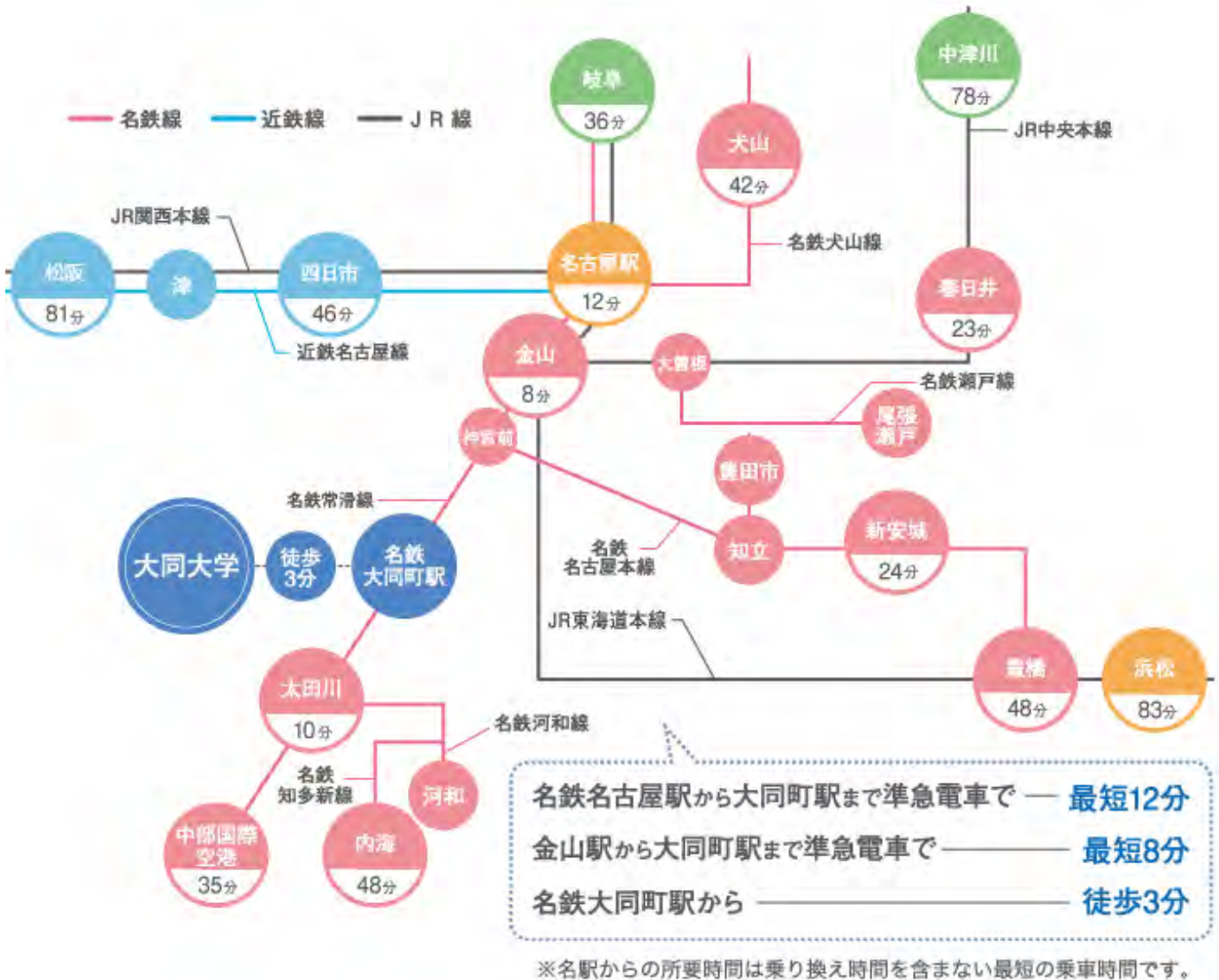
目次

大同大学への交通アクセスとキャンパスマップ*****	3
参加される方へお知らせ*****	5
発表者の方へのお知らせ*****	7
大会プログラム*****	9
学会企画（特別講演1・特別講演2）*****	13
一般研究発表（口頭発表）*****	18
一般研究発表（ポスター発表）*****	28
企画プログラム開催履歴*****	32
テニス大会歴代優勝者*****	38
研究奨励賞歴代受賞者*****	41

大同大学への交通アクセスとキャンパスマップ

◆住所：〒457-8530 名古屋市南区滝春町 10-3

◆アクセス：詳細は、<https://www.daido-it.ac.jp/outline/access/> をご覧ください。





テニス学会会場 X 棟

- 1 A棟:本館 2 B棟:第1講義棟 3 C棟:ゴビーホール 4 D棟:第1実験棟・UMEDIO・創造製作センター
- 5 E棟:第2実験棟 6 F棟:第2講義棟 7 G棟:研究支援センター・学生ホール
- 8 G棟:におい・かおり研究センター 9 M棟:図書館 10 P棟:学生ロッカー棟
- 11 Q棟:第1クラブハウス棟 12 R棟:第2クラブハウス棟 13 S棟:第3講義・実験棟
- 14 N棟:石井記念体育館 15 ゴピーステージ 16 X(クロス)棟:第4講義棟

参加される方へのお知らせ

1. 学会大会参加の申込み

今大会への参加は、事前申込み制になっています、また、学会大会期間中の当日参加申込みも可能です。

《学会大会参加費》

事前申込み	正会員：5,000円 学生正会員：3,000円 非会員：7,000円 非会員学生：5,000円
当日申込み	正会員：6,000円 学生正会員：4,000円 非会員：8,000円 非会員学生：6,000円
テニス大会（小山秀哉杯）参加費	無料

2. 受付

大会1日目：12月9日（土） 9:00 受付開始 於：大同大学	学会大会参加事前申込みの方、ならび学会大会当日参加申込みの受付を行います。また、テニス大会（小山秀哉杯）への参加受付を行います。
大会2日目：12月10日（日） 9:00 受付開始 於：大同大学	学会大会参加事前申込みの方、ならび学会大会当日参加申込みの受付を行います。また、テニス大会（小山秀哉杯）への参加受付を行います。

当日参加申込みの方は、受付時に、参加費等のお支払いをお願い致します。当日、日本テニス学会に入会された方は、会員参加費にてご参加いただけます。大会参加事前申込みをされた方は、出席をお届けください。また受付にて全員の方に名札をお渡ししますので、お名前をご記入の上、見やすいところにお付けください。

3. テニス大会（小山秀哉杯）

12/10（日）に学会員の交流と親睦を中心としてダブルスを中心にテニス大会を開催します。上位入賞者には景品を用意しております。開始時刻までにテニスコートにお集まりください。テニスコートはアウトドアで、サーフェスはオムニコートです。なお、試合参加中に気分が悪くなった場合は、早急にお近くのスタッフにお伝えください。また、大会中に発生した事故および傷害につきましては自己責任とさせていただきます。休息や水分補給などは各自こまめにお取りください。

※雨天の場合、テニス大会は中止となります。

4. 昼食

昼食は各自でご準備ください。

5. 宿泊

宿泊は各自でご予約ください。

6. 公認指導者更新のための研修ポイント

学会に参加されますと日本テニス協会「公認指導者更新のための研修ポイント」、日本プロテニス協会「JPTAポイント」が付与される予定です。ポイント付与をご希望の方は受付時に「研修・実習活動実績証」（日本テニス協会）カードをご提出ください。カード返却は、提出日の夕方となります。プロテニス協会のポイント付与は受付時に**会員番号・氏名・所属**を記入して頂き、学会からプロテニス協会に申請を行います。また、個人からプロテニス協会に申請して頂くことも可能です。

7. 研究奨励賞

研究奨励賞は、テニス学会において優れた研究発表を行った若手研究者・指導者に、今後さらにその大成を期し、研究・指導振興の一助となることを目的として設置されたものです。選考対象は、第35回テニス学会一般研究発表者のうち、年齢が35歳以下の発表者です。運営委員による選考を行い、受賞者には表彰状と金一封の進呈があります。表彰式で授与を行います。

<学会大会に関するお問い合わせ>

第35回日本テニス学会大会事務局

大同大学 小屋 菜穂子

〒457-8530 名古屋市南区滝春町 10-3

TEL : 052-612-6651

E-mail: conf-35@jsts.cc

発表者の方へのお知らせ

◆口頭発表

- ・「口頭発表」は、**発表 10 分、質疑 5 分の計 15 分**でお願いします。進行は座長に一任ください。テニス学会は創立当初から、「現場と研究のギャップを埋める」というコンセプトを掲げてきました。「研究結果を現場で活用できるように心がけよう、提言を行おう」という思いがあったのですが、実際には、「有意差が出なかった」「データ数が少なかった」「ここまで言ったら拡大解釈と言われる恐れがある」等の理由から、現場に向けた具体的なメッセージを発信するには至らないケースも多かったと思います。そこで本大会は、データや事例に直接的に基づく「結果」「考察」とは別に、スライドの最後に「現場への提言」（名称はこの通りでなくても構いません）という 1 枚もしくは数枚を作ってください、「現場でこのように応用できるかもしれない」という発表者の方の思いを自由に発信していただきたいと思います。座長にもあらかじめこの点を理解していただいておりますので、安心して提言を行ってください。実りある学会大会にするためにご協力をお願いいたします。
- ・配布資料がある場合は 100 部準備してください。配布資料には、演題名、演者氏名、所属を明記してください。
- ・口頭発表では、学会事務局の用意する共用 PC（Windows PC）での発表、もしくは持込 PC での発表をお選びいただけます。受付時にどちらで発表されるかをお伝えください。

✓共用 PC を使った場合の注意

- ・発表セッション開始の 1 時間以上前（口頭発表①②で発表される方は 9:30 頃を目処に作業を完了してください）までに各発表会場にてスライド（Microsoft Office Power Point ファイル）をご提出ください。データの受付作業はスタッフが行いますが、小さい修正であればその場での修正が可能です。
- ・動画や共用 PC にデフォルトでインストールされていないソフトウェアを使用する場合は持込 PC での発表をおすすめします。
- ・発表データを作成する際、使用するフォントは Windows 標準のものをご使用ください。特殊なフォントを使用すると文字ズレやレイアウト崩れの原因となります。
- ・動画は発表データと合わせてフォルダにまとめてから Power Point に埋め込みを行ってください。・ Microsoft 365 がインストールされた PC を準備しております。

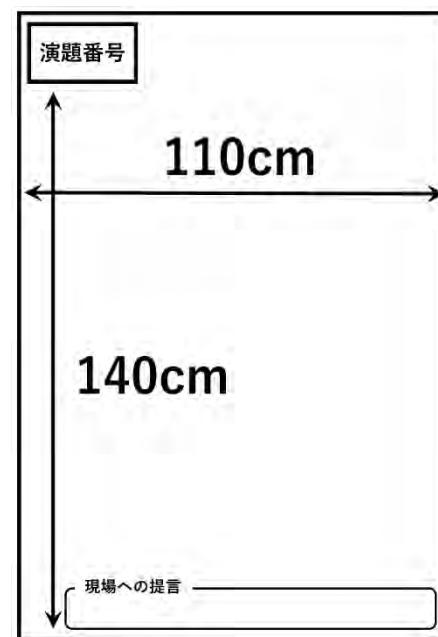
✓持込 PC を使った場合の注意

- ・受付時、持込 PC にて発表する旨を受付へお伝えください。
- ・持込 PC を使用して発表される場合、パソコンの映像出力端子は HDMI もしくは VGA（15pin）となります。最近の薄型 PC にはこの端子が付いていないことも多く、変換ケーブルが必要になる場合があります。その場合は必ず必要なケーブルをご持参ください。事務局でご用意いたしかねます。万が一動作しない場合に共用 PC をお使いいただくことができます。前項目の“共用 PC を使った場合の注意”をご覧ください。共用 PC でも動作可能な準備をお願いします。

- ・プログラムをご確認いただき、ご自身の前の発表者が発表を始めた段階で持込 PC（必要なケーブルを含む）を会場前方にあります「次演者席」前方の PC ブースにご提出ください。前の発表者の発表が終了した段階でディスプレイ画面の切り替え作業を行います。口頭発表のスムーズな進行にご協力ください。
- ※Apple 社製 PC では変換コネクタが必要です。HDMI や VGA のアダプターを必ずご持参ください。
- ※タブレット端末による発表はできません。
- ※持込 PC の場合、スクリーンセーバーや省電力設定、通知設定はあらかじめ解除しておいてください。解除されておりませんと発表中にこれらが作動し、進行に影響する可能性があります。
- ※作成いただいたデータは他の PC で読み取れない可能性があります。他の PC でも起動するかどうかをあらかじめ確認ください。

■ポスター発表

- ・本大会ではポスター発表にも座長が 1 人割り当てられ、発表者 1 人に対して 発表 3 分、質疑応答 2 分の合計 5 分を準備しています。進行は座長に一任ください。前記「口頭発表」部分に記載しましたように、本大会では研究結果を実践の場に役立てることを重視しておりますので、ポスターの一部にも「現場への提言」を盛り込んでくださいますよう、お願いいたします（右図例を参照ください）。詳しくは前記“口頭発表”欄を参照ください。
- ・ ポスターは 12 月 9 日（土）の 9:30 までに掲示を完了してください。
- ・演題 1 つに対して 1 枚のポスターパネルが用意されます。ポスターパネルのサイズは横 110cm×縦 140cm です。ポスター掲示用のテープは学会が準備します。左上角には大会事務局が用意する演題番号を貼付します。ポスターには、演題名、演者、共同研究者、所属を各自記載してください。
- ・ ポスターは 12 月 10 日（日）の 13:00 までに撤去願います。 所定の時間経過後に残されたポスターは、大会事務局にて処分させていただきます。



◎発表時間の厳守にご協力ください。

大会プログラム

大会前日：12月8日（金曜日）

18：00－19：20 運営委員会

大同大学

1日目：12月9日（土曜日）

9：00－ 受付 学会大会・テニス大会

（場所：X棟2F）

開会挨拶 司会：小屋菜穂子（大同大学）

（場所：X棟0202教室（2F））

9：45－9：50 会長挨拶 高橋仁大（テニス学会会長）

9：50－9：55 皆様へのお願い 小屋菜穂子（大同大学・第35回テニス学会事務局）

一般研究発表 口頭発表① 座長：高橋仁大（鹿屋体育大学）

（場所：X棟0202教室（2F））

10：00－10：15 演題番号 O1-1：

「大学男子テニス選手の試合中における表情表出と得失点の関係－1事例の検討－」

○山口幸生（福岡大学スポーツ科学部），村山さら（福岡大学スポーツ科学部）

10：15－10：30 演題番号 O1-2：

「グランドスラム大会の試合データを用いたスコア別ポイント重要度のモデル分析」

○吉澤将嗣（東京大学大学院）川本裕大（東京大学），竹下大介（東京大学）

10：30－10：45 演題番号 O1-3：

「世界トップクラステニス選手のポイント獲得に必要なショット数とラリー時間に関する研究」

○森嶋修（平成国際大学）

-10分休憩-

10：55－11：10 演題番号 O1-4：

「男子プロテニス選手におけるサービスパフォーマンスの指標の作成

- 1st サービスにおける着弾点に着目して-」

○大澤啓亮（鹿屋体育大学），村上俊佑（鹿屋体育大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

11：10－11：25 演題番号 O1-5：

「試合中のサーブ動作の分析にもとづく大学男子選手の技術的課題の抽出」

○堀内健太郎（日本体育大学大学院），杉田正明（日本体育大学），沼津直樹（日本体育大学）

阿江通良（日本体育大学）

11：25－11：40 演題番号 O1-6：

「男子プロテニス選手におけるポイント獲得に寄与した1st サービスの特徴について」

○中村和樹（鹿屋体育大学大学院），大澤啓亮（鹿屋体育大学），田代翔（鹿屋体育大学大学院）

村上俊祐（鹿屋体育大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

ランチブレイク

11：40－13：00 ランチブレイク

特別講演1 司会：小屋菜穂子（大同大学）

（場所：X棟0202教室（2F））

13：00－14：00

『テニスの普及・育成に向けた“オール愛知”の取り組み～プレーヤーセンタードの考え方から～』

宮尾英俊氏（名古屋高校，愛知県テニス協会 常務理事）

武田佳久氏（南山高等学校・中学校男子部教諭，愛知県テニス協会ジュニア委員長）

特別講演2 司会：北村哲（びわこ成蹊スポーツ大学） 小屋菜穂子（大同大学）

（場所：X棟0202教室（2F））

14：10－15：10

『部活動の地域移行とテニス競技の中体連加盟活動』

西村覚氏（島根大学）

一般研究発表 口頭発表② - A 座長：村上貴聡（東京理科大学）

（場所：X棟0202教室（2F））

15：20－15：35 演題番号 O1-7：

「児童期を対象とした短期テニス教室プログラムの有効性に関する研究：状況判断の定着に着目して」

○今井茂樹（山梨学院短期大学）

15：35－15：50 演題番号 O1-8：

「高校部活動でのテニス指導研究 《ボレー指導の実践と報告》」

○服部保弘（Kids Tennis Team KICKS）

15：50－16：05 演題番号 O1-9：

「「攻守一体プレイ」タイプネット型ゲームの戦術課題からみる評価方法の検討」

○西村覚（島根大学）

16：05－16：20 演題番号 O1-10：

「テニス競技のゲームパフォーマンスを構造化する試み」

○村上俊祐（鹿屋体育大学），田代翔（鹿屋体育大学大学院），中村和樹（鹿屋体育大学大学院）

大澤啓亮（鹿屋体育大学），岡村修平（大阪体育大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

一般研究発表 口頭発表② - B 座長：村田宗紀（東洋大学）

（場所：X棟 0203 教室（2F））

15：20－15：35 演題番号 O1-11：

「テニスのミックスダブルスにおける勝敗に関する一考察：世界一流プレーヤーを対象として」

○板橋クリストファーマリオ（北里大学）

15：35－15：50 演題番号 O1-12：

「フォアハンドストロークにおける競技レベル間のボールコントロール能力と体幹回旋動作の違い」

○魚田尚吾（関西大学），川上諒（大阪大学），丸谷賢弘（大阪大学・大阪体育大学）

中田研（大阪大学）

15：50－16：05 演題番号 O1-13：

「グラウンドストロークにおける体幹の上下軸周りのトルク増加がラケットスピードに与える影響」

○川本裕大（東京大学），竹下大介（東京大学），吉岡伸輔（東京大学）

16：05－16：20 演題番号 O1-14：

「世界の若年トッププレイヤーのテニス」

○弓野憲一（弓野教育研究所）

総会 司会：宮地弘太郎（大阪体育大学）

（場所：X棟 0202 教室（2F））

2日目：12月10日（日曜日）

9：00－ 受付 学会大会・テニス大会

（場所：X棟 2F）

一般研究発表 口頭発表③ 座長：北村哲（びわこ成蹊スポーツ大学）

（場所：X棟 0202 教室（2F））

9：30－9：45 演題番号 O1-15：

「プロテニスプレーヤーにおけるリターン方法とポイント取得率との関係」

○田代翔（鹿屋体育大学大学院），中村和樹（鹿屋体育大学大学院），村上俊祐（鹿屋体育大学）

高橋仁大（鹿屋体育大学）

9：45－10：00 演題番号 O1-16：

「屋根付きテニスコートの日射遮蔽効果の検証－名古屋市東山公園テニスセンターの事例－」

○刑部純平（愛知みずほ大学），加治木政伸（筑波大学），松岡大介（中京大学）

松本孝朗（中京大学）

10:00-10:15 演題番号 O1-17:

「AI・アバター技術の快適・公正か、審判員の自由か

: 21世紀のテニス審判を東京2020大会展望調査から問う」

○発田志音(東京大学), 日置和暉(慶應義塾大学), 村上貴聡(東京理科大学)

10:15-10:30 演題番号 O1-18:

「テニス競技における「ブレイクスルー」を可能にする要因: 全国大会上位進出選手を事例とした質的研究」

○日置和暉(慶應義塾大学), 発田志音(東京大学), 井庭崇(慶應義塾大学)

一般研究発表 ポスター発表 座長: 後藤光将(明治大学)

(場所: X棟2Fラウンジ)

10:40-10:45 演題番号 P1:

「小型無線多機能センサによるフォアハンドのグラウンドストロークにおける頭部の加速度と角速度の波形の特徴の解明」

○岩本淳(岩手県立大学 高等教育推進センター)

10:45-10:50 演題番号 P2:

「プロのプレー動画視聴が大学生テニス受講者に及ぼす影響 - スキル獲得に向けた自己の気づきについて -」

○武田守弘(広島文化学園大学)

10:50-10:55 演題番号 P3:

「大学テニス選手の主観的幸福感からみた状態・特性不安およびバーンアウト傾向との関係」

○和田太一(日本大学大学院), 田島勇人(日本大学大学院), 高橋正則(日本大学)

10:55-11:00 演題番号 P4:

「小学校体育におけるテニス型授業は子どもたちにとってどんな授業なのか?」

○北村哲(びわこ成蹊スポーツ大学), 大西祐司(びわこ成蹊スポーツ大学)

小谷幸平(兵庫教育大学連合大学院)

テニス大会 進行: 松本健太郎(東海学園大学)

(場所: X棟横テニスコート)

11:20-12:20

※雨天の場合, 中止.

表彰式 司会: 小屋菜穂子(大同大学)

(場所: X棟0202教室(2F))

12:30-12:35 奨励賞・テニス大会入賞者の発表 (テニス学会会長)

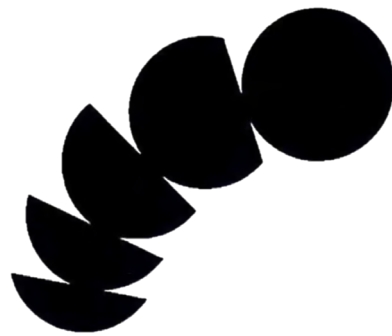
閉会式

(場所: X棟0202教室(2F))

12:35-12:40

学会企画

特別講演



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

特別講演 1

12月9日(土) 13:00-14:00 X棟0202教室

司会：小屋菜穂子 (大同大学)

講師：宮尾 英俊 氏 (東海テニス協会ジュニア委員長)

武田 佳久 氏 (愛知県テニス協会ジュニア委員長)

愛知県テニス協会ジュニア委員会の普及活動

『テニスの普及・育成に向けた”オール愛知”の取り組み～プレーヤーセンタードの考え方から～』

全国的に夏の暑さ、少子化、端末ゲームの普及、コロナ禍の影響で小・中学生、高校生のスポーツ離れが進み、ジュニアのテニス人口が激減している。愛知県も例外ではない。

愛知県テニス協会ジュニア委員会では、ジュニアへの普及の問題点がどこにあるかを話し合った。そこで出た結論は、「ジュニアがテニス(試合)を楽しむ場が少ない。」、すなわちゲームを楽しむ場を提供することがテニスの継続・普及にとって大切という内容である。中学、高校でテニスを始めた選手が、テニスの楽しさ、魅力である大会や練習試合に参加する機会が少なく、その楽しさを知る前に多くの選手がテニスを止めてしまうのが現実である。

そこで愛知県テニス協会では、県下のテニスに関わる全ての人の力で、テニスの普及に取り組もうと、以下の3つのプロジェクトを始めた。

- ①愛知カラーボールプロジェクト (小学生対象、2022年～)
- ②SCHOOL TOUR (小・中・高校生2023年～)
- ③愛知県テニス協会承認ポイント対象大会 (小・中・高校生2023年～)

現在、愛知県テニス協会が主動し、民間テニスクラブ、公営コート、NPO法人、大学、高校、中学校が、「楽しくゲームができる場の提供」をキーワードに活動を進めている。

これらの3つのプロジェクトについてお話ししたいと考えている。

講演者 プロフィール

宮尾英俊氏

経歴

1960年2月5日生まれ。愛知県出身。

1982年 筑波大学体育専門学群卒業

1982年～1983年 愛知県立瀬戸南高等学校 (定時制)

1983年～1994年 名古屋鉄道株式会社 スポーツ事業部

1994年～1998年 (財)スポーツ医・科学研究所

1998年～ 現在 名古屋高等学校教員

現在 日本テニス協会評議員

日本テニス協会アカデミー委員会委員



日本テニス協会ジュニア大会委員会委員
東海テニス協会理事
東海テニス協会ジュニア委員長
愛知県テニス協会常務理事

資格

(公財) 日本テニス協会公認テニスコーチ 4 (マスターコーチ)
(公財) 日本テニス協会公認テニス上級コーチ (マスターコーチ)

主な業績、指導実績

名古屋高等学校テニス部監督として全国高校総体で 2000、02、03、10 年と 4 度団体優勝
2022 年度 (公財) 日本テニス協会公認テニスコーチ 1 講師
2023 年度 (公財) 日本テニス協会公認テニスコーチ 1、2 講師

著書

「ライバルに差をつけろ! 自主練シリーズ テニス」 ベースボール・マガジン社

講演者 プロフィール

武田佳久氏

経歴

1984 年 3 月 27 日生まれ。愛知県出身
2006 年 南山大学卒業
2006 年～2023 年 南山国際高等学校・中学校 教諭
2023 年～ 現在 南山高等学校・中学校 男子部 教諭
愛知県テニス協会ジュニア委員長
愛知県中学校テニス連盟理事

資格

(公財) 日本スポーツ協会公認テニスコーチ 3
B 級レフェリー
B 級審判員

主な業績、指導実績

2023 年度 (公財) 日本スポーツ協会公認テニスコーチ 1 講師



特別講演 2

12月9日（土）14：10－15：10 X棟 0202 教室

司会：北村哲（びわこ成蹊スポーツ大学） 小屋菜穂子（大同大学）

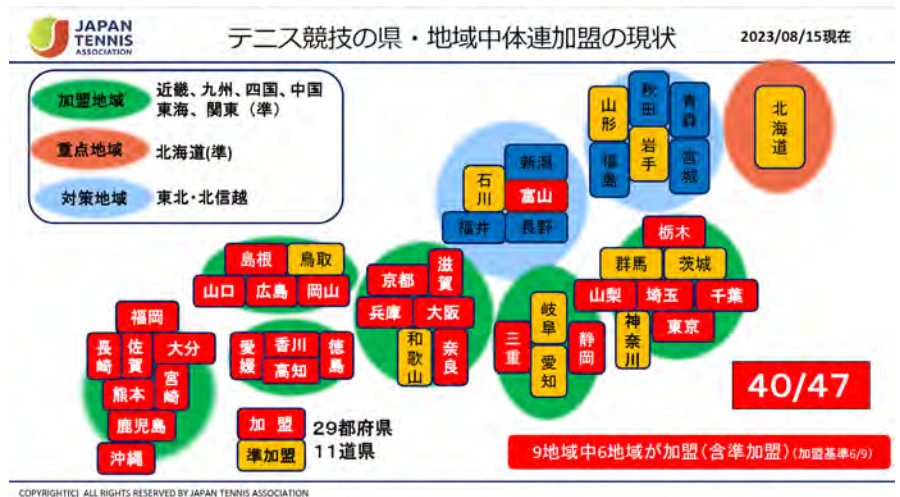
講師：西村 覚 氏（島根大学、日本テニス協会 普及推進副本部長・総務財務副本部長）

『部活動の地域移行とテニス競技の中体連加盟活動』

・中体連加盟活動のこれまでと現状

1974年に第1回全国中学生テニス選手権大会が開催され、今年の香川大会で50回を迎えた。全中の開催を中心に進められてきた、中学校年代の普及活動としてのいわゆる中体連加盟（テニス競技の全国中学校体育大会への種目加盟）活動も半

世紀に及んでいる。1993年には5県であった加盟都道府県も現在では準加盟を含め40の都道府県となり、全国の7地域が加盟に相当する状況にある。全国中体連の定める競技新加盟基準をほぼ満たし、細部の条件を整えた上で申請の段階に近づいている。これまでの活動を振り替えるとともに現状と今後の課題について共有を図る。



・部活動の地域移行の現状と課題

2018（H30）年「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が発表された。その内容を受けて、2021（R3）年から「運動部活動の地域移行に関する検討会議」が開かれ、2022年（R4）6月には3年間で休日の運動部活動を地域移行するという目標が示された。かねてより提案されていた部活動の地域移行ではあるが、少子化と教員数の減少により部活動そのものの維持が困難な状況にあること、また教員の働き方改革との関連からこれまでとは異なる大きな動きとなっている。すでに、今年度より中体連は、地域クラブからの大会参加を承認したことから、中学校年代のスポーツ環境は大きな変化がおきつつある。

部活動の地域移行は、学校における部活の創部には逆風で有り、中体連加盟とは逆行する流れと捉えられがちであるが、中学校年代におけるテニス・スポーツの普及と維持発展の観点から捉えることもできる。従来閉鎖的であった学校の部活動の門戸が地域へ開かれたことから、生徒が学校の教育活動の一環として地域に出やすくなるとともに、地域の指導者も学校の部活動に参加が容易になると言えよう。テニス

はクラブやスクールなど地域での活動が盛んであり、指導者も少なくないことからこの改革を肯定的に捉えることができる。

しかし、その一方で、地域間格差や指導者・活動の場・予算の確保、生徒保護者の負担など検討すべき課題は少なくない。課題の共有を図るとともに、地域移行をより良いものとして行くための方策をフロアとともに考えていきたい。

プロフィール

西村 覚 氏

経歴

1963年 生まれ。東京都出身

1989年 筑波大学大学院体育研究科修士課程修了

1989年 島根大学教育学部 准教授

2001年～2003年 日本テニス協会 競技者指導育成推進委員会委員

2003年～2005年 日本テニス協会 強化システム委員会委員

2005年～2007年 日本テニス協会 一貫指導体制推進委員会委員

2007年～2009年 日本テニス協会 強化企画委員会 委員長

2009年～2019年 日本テニス協会 全国プロジェクト副委員長

2013年～2023年 日本テニス協会 ジュニア委員会委員長

2018年～2023年 日本テニス協会 常務理事・普及推進本部長

現在 日本テニス協会 普及推進副本部長・総務財務副本部長

中国テニス協会 副理事長

中国四国学生テニス連盟会長

島根県テニス協会 理事長



資格

(公財) 日本体育協会公認テニスコーチ4 (マスターコーチ)

主な業績・指導実績

「Play Tennis Manual」(翻訳)、(財)日本テニス協会編

「テニス指導教本I」(公財)日本テニス協会編

「球技スポーツ戦術の一般化および統一理論」

「ジュニアテニス選手のサービスポジションに関する調査研究」

「大学体育のテニス授業におけるPLAY+STAYプログラム展開の有用性の検討」

「小学校放課後クラブ活動へのテニス導入の試み-島根県テニス協会と松江市との取り組みから」

「テニス指導の評価方法に関する提案 体育授業の記録・評価方法活用の可能性」

・島根大学テニス部監督(1989～現在に至る)

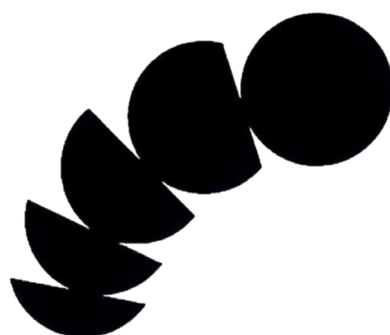
・日本大学対抗テニス王座決定試合出場

女子団体：2003、2004、2006年：ベスト16、2005年、ベスト8、

・日本学生テニス選手権 女子単ベスト8

一般研究発表

口頭発表



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

大学男子テニス選手の試合中における表情表出と得失点の関係－1 事例の検討－

○山口幸生（福岡大学スポーツ科学部），村山さら（福岡大学スポーツ科学部）

テニスではプレー直前の感情状態が、パフォーマンスに影響する可能性がある。この感情状態の新たな推定手法として、AIを用いた表情成分分析法が開発され、一流選手間で得点につながる感情状態は異なることが報告されている（Kovalchikら、2018）。そのため選手に適した感情コントロール能力を高めるために、まず、選手毎に試合中の表情成分を分析し、特徴を明らかにする必要がある。本研究は、試合中の選手のポイント取得前と失点前、およびサーブ前とレシーブ前の表情成分を比較することを目的とした。

分析対象は、大学男子テニス選手1名の1試合であった。表情成分分析にはFaceReader Ver.9（Noldus社製）を用いた。分散分析の結果、ポイント取得前の「中立」表情成分（45%）は、失点時（50%）、フォルト時（50%）より低かった（ $p<.05$ ）。ポイント取得前の「恐れ」表情成分（14%）は、失点時（9%）、フォルト時（7%）より高かった（ $p<.01$ ）。レシーブ前では、「中立」「喜び」「無関心」「感情価」がサーブ前より高く（ $p<.01$ ）、「怒り」「驚き」「嫌悪」はサーブ前より低かった（ $p<.01$ ）。

グランドスラム大会の試合データを用いたスコア別ポイント重要度のモデル分析

○吉澤将嗣（東京大学大学院）川本裕大（東京大学），竹下大介（東京大学）

同じ実力を持つ選手間の対決や、より高い実力を持つ選手に挑む試合での勝利の価値は非常に大きい。そのため、試合の要所を正確に把握することは極めて重要である。これまでに、1ポイントの得点率からマルコフ連鎖過程を用いて1セットの勝率を表現できることが示されている（Newton and Keller, 2005）。しかしこのモデルでは、具体的なスコアにおけるポイント獲得の重要度は明らかにされていない。

本研究では、2011-2018年のグランドスラム男女シングルの試合データを使用し、対戦相手同士が同じ総得点となったセットを解析した。その結果、総得点と同じという、どちらもセット取得の可能性が十分にある状況では、セット勝者は0-0（ラブオール）の局面で有意に得点していたことが明らかになった。得られた結果を確率論的に説明するために、ポイント取得率がスコアに依存する数学的モデルを構築し、各スコアにおけるポイント取得率の変化が試合の勝率にどのように影響を及ぼすかを検証した。この手法を用いて、各ポイントの重要性を詳細に理解できる可能性が示唆された。

世界トップクラステニス選手のポイント獲得に必要なショット数とラリー時間に関する研究

○森嶋修（平成国際大学）

本研究はプロテニス選手が出場するトップレベルの大会において、ポイント獲得に必要なショット数とラリー時間調査し、近年のテニスの特性を明らかにすることを目的とした。2022年に行われた全米オープンテニス大会男子シングルス決勝と準決勝の3試合を分析の対象とした。試合の総セット数は13セット、総ゲーム数は132ゲーム、総ポイント数は794ポイントであった。分析の結果、全試合の平均ショット数は4.71回、平均ラリー時間は5.93秒であった。なお、ラリーが決着する機会はレシーブである2球目が最も多く162回であった。また、プレーの平均時間は26.18分であり、試合時間の12.2%がプレー時間であった。次に、ゲームを取得するために重要とされている30-30とDeuceの場面において平均ショット数と平均ラリー時間を調査した結果、30-30では4.56回と5.59秒であり、Deuceでは5.55回と6.92秒であった。

今後はより多くの試合を分析し比較検討すること、また、異なるコートサーフェイスや競技レベルの対象者で調査を実施することが求められるだろう。これらの調査を進めることで、より正確にプレーの動向や変化を把握することができ、適切なトレーニングや効果的なコーチングを実施することが期待できる。

男子プロテニス選手におけるサービスパフォーマンスの指標の作成 - 1st サービスにおける着弾点に着目して -

○大澤啓亮（鹿屋体育大学）、村上俊佑（鹿屋体育大学）、高橋仁大（鹿屋体育大学）

プロのテニス選手の試合ではボールのイン・アウトの判定にHawk-Eyeシステムが導入されており、選手やボールの位置座標などのデータが計測されている。計測されたデータの一部はMatch Statisticsと呼ばれる統計データとして公開されており、試合の勝敗との間に高い相関関係があることが報告されている（Cui et al., 2020）。一方、ショーンボーン（2015）はスタッツには試合の流れや打球の質についての情報は含まれていないと指摘しており、質の高いショットによるポイントなのか、相手のミスによるポイントなのかは不明である。そこで本研究では、ショットの質を反映した新たな指標を作成することを目的とした。分析の対象は2023年に行われた全豪オープン男子シングルスとし、右利き選手の1stサービスの着弾点を特徴量として用いた。分析の手法は機械学習における教師あり学習を適用してモデルを構築し、サービスに関連するスタッツと比較することで妥当性を検証した。分析の結果、予測精度の高い指標が得られ、「%1st Serve Point Won」や「%Service Games Won」、「Ace/Match」との間に中程度の相関関係がみられた。以上のことから、本研究で作成した指標は選手のサービスパフォーマンスを定量化する指標であることが示唆された

試合中のサーブ動作の分析にもとづく大学男子選手の技術的課題の抽出

○堀内健太郎（日本体育大学大学院），杉田正明（日本体育大学），沼津直樹（日本体育大学），
阿江通良（日本体育大学）

大学男子テニス選手は，サーブに課題があるとされているが，選手自身や指導者の経験や感覚などにもとづいた指導が多く見られ，サーブ動作が客観的に評価されていないことがその一因と考えられる．そこで本研究では，大学男子選手を対象として，試合中のサーブ動作を分析し，ラケットスピードの異なる群間でその動作を比較することで，下位群の技術的課題および指導への示唆を得ることを目的とした．対象は大学選手28名で，競技レベルはインカレ優勝から地区予選レベルであった．試合中，各対象者のボールスピードが最も大きかった試技を3次元動作分析した．平均ラケットスピード $39.0 \pm 3.7 \text{m/s}$ よりもラケットスピードが大きかった選手を上位群 ($n=12$)，小さかった選手を下位群 ($n=16$) とした．ラケットスピード（上位群： $42.7 \pm 1.8 \text{m/s}$ ，下位群： $36.2 \pm 1.8 \text{m/s}$ ）およびボールスピード（上位群： $50.2 \pm 2.9 \text{m/s}$ ，下位群： $44.6 \pm 3.1 \text{m/s}$ ）において両群間に有意差がみられた．また下位群では，上位群よりも準備局面において上肢の挙上タイミングが早い，体幹の後傾および両腰水平回転角度が大きくなるなどの相違がみられた．これらがラケットスピードと関係があるとみられることから，下位群の技術的課題であると考えられた．

男子プロテニス選手におけるポイント獲得に寄与した1st サービスの特徴について

○中村和樹（鹿屋体育大学大学院），大澤啓亮（鹿屋体育大学），田代翔（鹿屋体育大学大学院），
村上俊祐（鹿屋体育大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

テニスにおいて，サービスは唯一対戦相手の影響を受けないクローズドスキルであり（日本テニス協会，2015），最も重要な技術である．これまでに様々なサービスに関する研究が行われているが，ポイント獲得に直接寄与したサービスの特徴を明らかにした研究は見られない．そこで本研究では，テニスにおけるトラッキングデータを活用した1st サービスがどの程度得点に寄与したかを評価するモデルを開発することとした．男子プロテニス選手における1st サービスにおける優位性はラリー4回目まで持続する（O'Donoghue & Brown, 2008）ことから，ラリー4回目までにポイントが終了し，サーバーのエース（及びウイナー，またはリターナーのフォーストエラーによってポイントが終了した1st サービスを，ポイント獲得に寄与したサービスと定義した．分析の対象は2023年全豪オープン男子シングルスとした．分析の手法は決定木分析の一種である勾配ブースティング決定木を用いた．特徴量にはサービスのスピード，回転の種別，着弾点の座標（ x, y ）を用いた．分析の結果，モデルの予測精度の高さが認められた．

児童期を対象とした短期テニス教室プログラムの有効性に関する研究：状況判断の定着に着目して

○今井茂樹（山梨学院短期大学）

日本のテニス人口は減少傾向にある。多くの人々がテニスに親しめるような環境をどのように構築していけばよいのだろうか。まず重視すべきことは、「ジュニアにおける普及活動が必須であり、特にテニス体験の機会を増やす活動と仕組みが必要な状況」（日本テニス協会，2023）といった指摘があるように、日本全国の子どもたちへのテニスの面白さの体験機会の提供である。

これまでに開発された児童期向けプログラムでは、スキル重視ではなく、状況判断を強調し、「ゲームを楽しむ」ことを共通項に展開されてきている（日本テニス協会，2016;今井，2023）。一方、状況判断にかかわる成果や課題における分析がなされていないことを指摘できる。ゲームを楽しむことを重視したプログラム展開の中で、子どもたちが適切な状況判断を定着させ、さらに満足感を示すことができれば、状況判断を通してゲームを楽しむことの一つの指標となるだろう。

かかる問題意識に立ち、本研究では、児童期を対象に、週に一度、連続的に合計8回という短期的なテニス教室プログラムを構築・実践し、短期テニス教室プログラムとしての有効性について検討することを目的とする。

高校部活動でのテニス指導研究 《ボレー指導の実践と報告》

○服部保弘（Kids Tennis Team KICKS）

2020年に再任用教諭を終えるまで、公立高校のテニス部顧問として指導に携わってきました。ボレーとは飛んできたノーバウンドのボールをネットから近い位置で打ち返します。ネットから近い位置にポジションを取ることで広角な範囲に打つことができます。相手は打ち返すことができず、ポイントにすることができるショットです。プレー自体は簡単そうに見えますが、イージーなボールでもミスを犯す、そして繰り返すことがあります。ミスを恐れて苦手としているプレーヤーも多く見かけてきました。これは初心者だけでなく、都道府県大会や全国大会に出場する選手にも見られます。

どのようにボレーをすれば攻撃の武器となり、ポイントを確実に取る手段になるかを長年考え、ラケットやストリングスの機能や特性、ボールがラケットに当たる(衝突する)際の物理的な運動の変化(運動量と力積)や現象も解析しながら、私なりに考え、実践してきた指導方法を紹介したいと思います。

「攻守一体プレイ」タイプネット型ゲームの戦術課題からみる評価方法の検討

○西村寛(島根大学)

小学校でテニピンをはじめとした「攻守一体プレイ」タイプのネット型ゲームの実践が増えている。ボールゲームの類型化は、ゲームの本質となる戦術的課題を整理することで、学習者の技術レベルにかかわらず戦術面での学習を展開し、その「型」が持つ特有の「攻防」の楽しさに触れさせることが意図されている。「攻守一体プレイ」タイプの楽しさは、「ラリーの続く」中で「相手が捕りにくいボールを返球する」ことによる「攻防」にある。しかし、「攻守一体プレイ」タイプは、戦術的課題が十分明確になっていないためか、「ラリーを続ける」ことが課題となり、「攻防」の楽しさがみられない授業が多い。

そこで、ネット型ゲームの構造論から、「攻守一体プレイ」タイプのネット型ゲームの戦術的課題や問題解決に必要な動きと技術を再確認する。それを元に「攻守一体プレイ」タイプのネット型ゲームのパフォーマンス評価法の提案を試みる。評価法は、状況判断に基づく意思決定を評価のカテゴリーに含めることを念頭に、授業場面において使用可能な簡便なものを目指した。これにより、「攻防」の楽しさに触れる授業が増えることを期待したい。

テニス競技のゲームパフォーマンスを構造化する試み

○村上俊祐(鹿屋体育大学), 田代翔(鹿屋体育大学大学院), 中村和樹(鹿屋体育大学大学院)
大澤啓亮(鹿屋体育大学), 岡村修平(大阪体育大学), 高橋仁大(鹿屋体育大学)

トレーニングを効果的に推進するためには、まず目指すスポーツパフォーマンスの構造、すなわち設計図としての構造モデルを明示する必要があるといわれており(JSPO, 2019)、公認スポーツ指導者養成講習会で用いられる資料にも、例として跳躍種目とスプリントにおけるパフォーマンス構造が示されている(日本体育協会編, 2013)。こうした陸上競技の跳躍種目やスプリントなどの測定競技におけるパフォーマンスは、跳躍距離や走タイムといった明確な指標があることから比較的構造化しやすいと考えられるが、球技スポーツにおいてはそのパフォーマンス構造を戦術、技術、体力といった階層構造で捉える必要があるとともに、より抽象化した概念でパフォーマンスを説明する必要があるだろう。本論では、著者がこれまでに受講した資格講習会やカンファレンスをはじめ、テニスやトレーニングに関する著書の内容や自身の指導経験に基づき、テニス競技のゲームパフォーマンスの構造化を試みた。本発表では「プレーモデルの全体像(岡田, 2019)」を参考に著者が作成したテニスのゲームパフォーマンス構造を示し、その具体的な活用方法にも言及する。

テニスのミックスダブルスにおける勝敗に関する一考察: 世界一流プレーヤーを対象として

○板橋クリストファーマリオ(北里大学)

男女がペアを組んでプレーするミックスダブルスは、オリンピック、グランドスラム大会、ユニバーシアード大会で採用されているにも関わらず、その研究はほとんど行われていない。本研究は、ミックスダブルスのゲーム様相を「男性サーブ対男性レシーブ」「女性サーブ対女性レシーブ」「男性サーブ対女性レシーブ」「女性サーブ対男性レシーブ」の4局面に分類してゲームパフォーマンス分析を行い、それぞれの局面におけるプレー内容について、勝者と敗者の間にどのような違いがあるのか明らかにすることを目的とした。

対象とした試合は、2021年から2023年に開催された全豪オープンと全米オープン(ともにハードコート)の準々決勝以降の試合であり、全ての試合は3セットマッチ(ノーアドバンテージ方式、ファイナルセットは10ポイントタイブレーク)であった。試合の映像は、WOWOW オンデマンドにアーカイブされたものを用いた。そして、ファーストおよびセカンドサーブの速度、成功率、得点率とラリー回数、最終ショットの打球者とその種類についてデータを取集し、試合の勝者と敗者の比較を行った。

結果および考察については当日、発表する。

フォアハンドストロークにおける競技レベル間のボールコントロール能力と体幹回旋動作の違い

○魚田尚吾(関西大学), 川上諒(大阪大学), 丸谷賢弘(大阪大学・大阪体育大学), 中田研(大阪大学)

競技パフォーマンスの高い選手はストローク時の体幹上部と下部の回旋速度が高く、それらの最大角速度発生時差が長いことが報告されている。本研究の目的は、競技レベルおよび性別の違いによるボールコントロール能力と体幹回旋動作の特徴を探索することであった。合計166人のボランティアが研究に参加した。2つの慣性式9軸モーションセンサ(スポーツセンシング社)を第3胸椎背面と仙骨背面の上後腸骨棘間に直接両面テープで貼り付けた。参加者は手出しのボールを腰の高さでベースラインからターゲットに向かってフォアハンドストロークを行った。10試技の合計点が低いほど、ボールコントロールが高いと評価した。二元配置分散分析(性別×競技レベル)によりコントロールスコア、体幹上部および下部の角速度、体幹下部と上部の最大角速度発生時差の差を検定した。その結果、上記4つの変数において性差は現れなかった。一方、ジュニアや成人の競技者は初心者や一般の愛好者と比べ、ボールコントロール、体幹の上部および下部の角速度が有意に高かった。本研究では競技レベル間に体幹回旋速度だけでなく、ボールコントロール能力にも違いがあることを明らかにした。

グラウンドストロークにおける体幹の上下軸周りのトルク増加がラケットスピードに与える影響

○川本裕大（東京大学），竹下大介（東京大学），吉岡伸輔（東京大学）

グラウンドストロークのトレーニングとして、メディシンボールサイドスローなどの体幹を回旋させる動作を含むトレーニングが行われている。一方で体幹の回旋トルクがラケットスピードに与える影響は明らかにされていない。本研究ではまず、テニス熟練者の実動作の解析を通して、体幹の回旋トルクの大きさとラケットスピードの関係を明らかにした。体幹の回旋トルクの最大値とラケットスピードの間には正の相関関係が認められた。つまり、概して体幹の回旋トルクを大きく発揮できている被験者ほどラケットスピードが大きかったといえる。次にコンピュータシミュレーションを用いて、実動作に対して体幹の回旋トルクを増加させた際にラケットスピードがどの程度増加するかを定量した。各時刻の打撃方向の体幹の回旋トルクを10%または20%増加させると、ラケットスピードはそれぞれ平均で4.1%、7.4%増加した。各被験者の4試行のラケットスピードの変動係数は平均で2.2%であったため、体幹の回旋トルクが10%増えるようにトレーニングすることで、試行ごとのばらつきと比べてラケットスピードが大きく増加することが明らかになった。

世界の若年トッププレイヤーのテニス

○弓野憲一（弓野教育研究所）

ここ数年、トッププレイヤーの若年化が進み、男女ともに、10代でグランドスラム大会のチャンピオンになる選手が現れた。男子ではスペインのアルカラス、女子ではアメリカのガウフが19歳でグランド・スラム大会のチャンピオンとなった。彼ら以外にも、10代もしくは20代初めの数人のプレイヤーが、世界のトップに名を連ねている。年若くして世界のトップにいるそれらのプレイヤーは、なぜ強いのか。この発表では、3人のプレイヤーを引き合いにだしながら、彼らのテニスの特徴をあげ、日本のジュニアの育成方法について考察をすすめる。

プロテニスプレーヤーにおけるリターン方法とポイント取得率との関係

○田代翔（鹿屋体育大学大学院），中村和樹（鹿屋体育大学大学院），村上俊祐（鹿屋体育大学）

高橋仁大（鹿屋体育大学）

テニスにおけるリターンに関して、これまでにレシーバーのポイント取得率やリターンコースのみに焦点を当てた研究は行われてきたが、リターン時の具体的な戦術およびそれらとポイント取得率の関係性を検討した研究は少ない。そこで、本研究ではリターン方法ならびにそれらがポイント取得率に及ぼす影響について検討することを目的とした。2019-2022年に行われた全米オープン18試合において、ラリーが3球以上行われた3100ポイントを対象とした。分析項目はサーブ、リターンのショット時間、リターン時における球種、フォアハンド、バックハンドの打球頻度、スプリットステップの着地方向、落下地点とした。各項目とポイント取得率を併せて分析を行った結果、1stおよび2ndサーブリターン時の得点時において、リターンのショット時間が失点時よりも有意に短いことが明らかとなった。この傾向はサーブのショット時間には見られなかった。また、リターンの落下地点がアドサイドコートの外側に落下した際、他の落下地点と比較し、有意にポイント取得率が高いことが明らかとなった。他の分析項目に関して、ポイント取得率に有意な関連性は見られなかった。

屋根付きテニスコートの日射遮蔽効果の検証－名古屋市東山公園テニスセンターの事例－

○刑部純平（愛知みずほ大学），加治木政伸（筑波大学），松岡大介（中京大学），松本孝朗（中京大学）

本研究の目的は、屋外テニスコートおよび屋内テニスコートの湿球黒球温度（WBGT）を夏季から秋季にかけて実測し、屋根による日射遮蔽効果が夏季のみならず秋季においても有効であるのかを実証することであった。方法：2019年8月24日から10月28日の期間、名古屋市東山公園テニスセンターの屋外および屋内テニスコートに携帯型WBGT計を設置し、WBGTの日最高値、日平均値を測定した。また、屋根による日射遮蔽効果として、WBGTの屋内外差を算出した（屋外テニスコートのWBGT値－屋内テニスコートのWBGT値）。なお、WBGTの屋内外差は、昼の時間帯（午前11時55分から正午）のWBGT値を用いて算出した。結果：WBGTの日最高値、日平均値は、屋内テニスコートにおいて屋外テニスコートと比較して有意に低い値を示した。8月、9月、10月の昼の時間帯におけるWBGTの屋内外差は、それぞれ $4.8^{\circ}\text{C} \pm 0.3^{\circ}\text{C}$ 、 $4.4^{\circ}\text{C} \pm 2.1^{\circ}\text{C}$ 、 $4.2^{\circ}\text{C} \pm 1.4^{\circ}\text{C}$ であった。一方で、月間のWBGTの屋内外差に有意差は認められなかった。結論：本研究の結果から、屋根による日射遮蔽効果が夏季だけでなく秋季においても保たれることが明らかとなった。したがって、テニス競技中の熱中症対策として屋内テニスコートの有効性が示された。

AI・アバター技術の快適・公正か、審判員の自由か：21世紀のテニス審判を東京2020大会展望調査から問う
○発田志音（東京大学），日置和暉（慶應義塾大学），村上貴聡（東京理科大学）

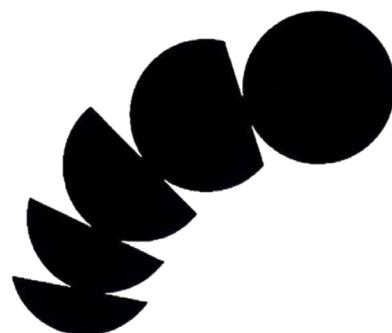
ATPは、AIによる線審自動化システムを2025年以降の全ツアー大会に導入すると発表した。これは、判定の正確性向上という「快適・公正」を追求した結果にほかならない。このような審判システムの刷新は、今後もサイバネティック・アバターの実装などによって加速し、自然人たる審判員の役割に大きな変化をもたらすと予測される。ところで、そうした刷新に際しては、自然人たる審判員らが活動に対していかなる展望を有していたか、検討することも重要である。なぜならば、スポーツは他の多くの経済活動と異なり、自然人らが感動や興奮を求めて自発的に参加できる点にこそ「自由」としての価値が最大化されるからである。すなわち、AI・アバター技術の導入に関して、テニス・ゲームの「快適・公正」の追求と、テニス審判員の「自由」は、相互に両立し難い価値なのである。そこで本発表では、東京2020大会のテニス競技に関して、大会前に審判員が有していた展望に関する調査結果を踏まえつつ、「快適・公正」と「自由」という相互に両立し難い価値のいずれを、いかなる理由で選択すべきか、検討する。なお本研究は、JST ムーンショット型研究開発事業、JPMJMS2215の支援を受けたものである。

テニス競技における「ブレイクスルー」を可能にする要因：全国大会上位進出選手を事例とした質的研究
○日置和暉（慶應義塾大学），発田志音（東京大学），井庭崇（慶應義塾大学）

スポーツ界において、ある時期を境に飛躍的に競技成績が向上する現象を「ブレイクスルー」と呼ぶことがある。「ブレイクスルー」という概念は、一般的に使用されることはあっても、学術的な検討は積み重ねられていない概念である。しかし、「ブレイクスルー」の実現を、多くの選手が目指す事柄の一つであると仮定すれば、その要因の解明は一定の価値を有すると考えられる。そこで本研究では、「ブレイクスルー」を「ある時期を境に競技成績が飛躍的に向上すること」と操作的に定義し、テニス競技において「ブレイクスルー」を可能にする要因を探索的に検討した。過去に「ブレイクスルー」を経験したことがあり、キャリアでの個人戦最高戦績が全国大会ベスト8以上のテニス選手8名を対象に、半構造化面接形式によるインタビュー調査を行い、インタビュー内容の質的分析を行った。その結果、3個のカテゴリー（高いモチベーションの保持、継続的な成長、試合での実力発揮）と、13個のサブカテゴリーが抽出された。本研究で得られた知見は、「ブレイクスルー」を目指し競技活動を行う現場の競技者、およびそれを支援する指導者にとって有益な情報となることが期待される。

一般研究発表

ポスター発表



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

小型無線多機能センサによるフォアハンドのグラウンドストロークにおける頭部の加速度と角速度の
波形の特徴の解明

○岩本淳（岩手県立大学 高等教育推進センター）

小型無線多機能センサはヒトやモノの動きを計測することを主目的としたセンサであり、振動の計測や動作解析などの実験・各種試験に幅広く使用されている。一方、ジャイロセンサを使用したフォアハンドのグラウンドストロークにおける体幹の回旋と角速度に着目した研究が進んでいる。本報告は、頭部に装着した小型無線多機能センサによって基礎技術であるフォアハンドのグラウンドストロークにおける加速度と角速度を計測し、その波形の特徴を局面構造のインパクトに着目して解明した。

プロのプレー動画視聴が大学生テニス受講者に及ぼす影響－スキル獲得に向けた自己の気づきについて－

○武田守弘（広島文化学園大学）

筆者はこれまで、大学における効果的なテニス授業の方策を検討してきた。武田（2012）では受講学生が感じているテニスの「難しさ」を分析し、受講生によってその「難しさ」が異なることを明らかにし、「難しさ」を解消できるような授業展開を提案した。さらに、武田（2022）ではコロナ禍の大学生が望むテニス授業を形式、時間、内容等から再検討し、コロナの脅威を理解しつつ、活動欲求の高まりや他者との交流を積極的に求める様相が示唆された。また内容から「プロ選手のプレーを見て学びたい。」という希望も多く見受けられた。そこで本研究では、各ショットに関するプロのプレー動画を視聴させ、そこから受講生が何を学び自分のスキル獲得に向けて実践しようとしているかを検討することで、プレー動画視聴の有効性や今後のスキル指導に有益な情報を得ることを目的としていた。

プロのプレー動画の詳細、ショットごとの特徴、授業での指導内容とは異なる気づき等について、自由記述形式で得られたデータをもとに分析している。

結果の詳細は当日発表する。

大学テニス選手の主観的幸福感からみた状態・特性不安およびバーンアウト傾向との関係

○和田太一（日本大学大学院），田島勇人（日本大学大学院），高橋正則（日本大学）

本研究の目的は、大学テニス選手の主観的幸福感からみた状態・特性不安およびバーンアウト傾向との関係について検討することであった。調査対象者は、大学テニス選手126名と一般学生130名とし、質問紙法による調査（プロフィール、主観的健康感尺度：SUBI、スポーツ特性-状態不安診断検査：TAIS.2 & SAIS.2、運動選手のバーンアウト尺度：ABI）を約2ヶ月間の期間において2回実施した。

その結果、TAIS.2, SAIS.2, ABIの各合計得点を従属変数、SUBIによる陽性感情と陰性感情、および下位11尺度を独立変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）によって、TAIS.2, SAIS.2, ABIにおいていずれも有意な回帰式が得られた。また、SUBIによる陽性および陰性感情の2尺度と、これらの下位11尺度の各得点について、被験者要因（大学テニス選手、一般学生）と時間要因（1回目、2回目）による2要因分散分析の結果、有意な交互作用が認められた尺度は、陽性感情、満足感、至福感の3尺度で、一貫して大学テニス選手は一般学生よりも有意に高かった。したがって、主観的幸福感を向上させることは、状態・特性不安やバーンアウト傾向の低減に関係し、結果として競技力向上を図るための競技継続に貢献する可能性が推察された。

小学校体育におけるテニス型授業は子どもたちにとってどんな授業なのか？

○北村哲（びわこ成蹊スポーツ大学），大西祐司（びわこ成蹊スポーツ大学）

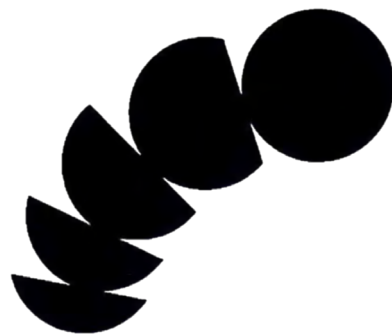
小谷幸平（兵庫教育大学連合大学院）

テニス活動は、身体的、また精神的健康への貢献が高く、テニス参加者は、様々な運動習慣を持つ者の中でも長寿の傾向があることが報告されていることから（Schnohr et al., 2018）、テニスは、生涯スポーツ種目として価値が高いと考える。学校体育の大きな目的が、豊かなスポーツライフの実現であることを考えると、テニス授業の推進に関わる研究は、非常に重要である。

本研究では、小学校の体育授業において、全6回から7回の授業計画からなるテニス型授業を受講した児童の、テニス授業に対する印象についての基礎的資料を得ることを目的に、「ボールの打感」や「達成感」、「ミスによる不安」等の独自の項目を設定した調査用紙によりアンケート調査を実施した。対象は、2校6クラス（5名の教師）の小学6年生157名であった。その結果、ポジティブな印象得点は、授業計画の前半および後半ともに中央値23点台（30点満点中）と高く推移し、一方ネガティブな印象得点は中央値7.7~8.1点（20点満点中）と半分より低かった。そして、各得点は、教師による有意な差は見られなかった。その他、生徒にとって好意的な教材であることが伺える結果が得られた。

MEMO

企画プログラム開催履歴



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

日本テニス学会 企画プログラム開催履歴

<p>第1回テニス研究会（平成元年10月） 東京大学教養学部</p> <p>●ジュニアのためのトレーニング</p> <p>山本秀一・栗山節郎・海野孝・笹原英夫・荒井貞光・佐々岡潔</p>
<p>第2回テニス研究会（平成2年9月） 東京大学教養学部</p> <p>●メンタル・トレーニングの理論と実際</p> <p>児玉光雄（テニストレーニング科学センター） 西山征（園田学園女子大学）高岡英夫（運動科学研究所）</p> <p>白山正人（東京大学）</p>
<p>第3回テニス研究会（平成3年10月） 大阪体育大学</p> <p>●10年後のテニスの医・科学を考える</p> <p>小浦猛志（宝塚テニスガーデン） 三浦朗（東北大学） 根本勇（日本女子体育大学） 辻田純三（兵庫医科大学）</p>
<p>第4回テニス研究会（平成4年9月） 吉田記念テニス研修センター</p> <p>司会：三浦朗（東北大学）</p> <p>●一地域における日本テニス研究会を媒介としたある啓蒙活動</p> <p>塩野谷明（長岡技術科学大学）</p> <p>●マラソン選手の活躍とトレーニング科学 司会：三浦朗（東北大学）</p> <p>小林寛道（東京大学）</p>
<p>第5回テニス研究会（平成5年11月） 大阪体育大学</p> <p>司会：中山厚生（天理大学）</p> <p>●テニスにおける思考力と精神力</p> <p>坂本京一（GTS アカデミー） 佐藤雅幸（専修大学） 中山厚生（天理大学）</p>
<p>第6回テニス学会；第1回アジアテニス医・科学会議（平成6年9月） 広島経済大学</p> <p>司会：磨井祥夫（広島大学）</p> <p>●中華人民共和国における選手育成システム</p> <p>郭 漢琴（元中国女子テニスチーム監督・深川市テニス協会強化委員長）</p> <p>●日本テニス選手の育成システム</p> <p>浅沼道成（岩手大学）</p>
<p>第7回テニス学会（平成7年12月） （財）スポーツ医・科学研究所</p> <p>●最新世界テニス事情</p>
<p>第8回テニス学会（平成8年11月） 長岡市市民体育館</p> <p>司会：友末亮三（（財）スポーツ医・科学研究所）</p> <p>●日本のテニス選手は世界でどこまで通用するか</p> <p>藤瀬武彦（新潟国際情報大学） 堀内昌一（亜細亜大学） 海野孝（宇都宮大学）</p>
<p>第9回テニス学会（平成9年11月） 専修大学</p> <p>司会：佐藤雅幸（専修大学）</p> <p>●テニス起源論を巡る謎について</p>

<p>稲垣正浩（日本体育大学）</p> <p>●テニスでメシが食えるか？</p> <p>中川智文（テニスクラシック編集部） 丸山薫（JTA ナショナルテニスセンター）</p> <p>松原雄二（㈱テニスクリエイション） 佐藤雅弘（JAM プランニング）</p>
<p>第10回テニス学会（平成10年9月） 岩木山総合公園</p> <p>司会：村松憲（慶應義塾大学）</p> <p>●テニス学会の将来展望</p>
<p>第11回テニス学会（平成11年11月） 白百合女子大学</p> <p>●野球は科学を現場にどう生かしているか</p> <p>平野裕一（東京大学）</p> <p>●ジュニア選手がトップを目指すにはどうすればよいか</p> <p>西野真一（JTA ナショナルトレーニングセンター） 岩月俊二（（財）吉田記念テニス研修センター）</p> <p>田村信也（ブリヂストンスポーツ）</p>
<p>第12回テニス学会（平成12年11月） 職業能力開発総合大学校</p> <p>●リングを利用した動作のアウトプットコントロールとサイバネティックスのトレーニング、など</p> <p>飯島庸一（S-CHALLENGE Training Program Works）</p> <p>●研究成果は現場でどう活用されているか</p> <p>高橋仁大（鹿屋体育大学） 道上静香（筑波大学） 田中伸明（東京電機大学）</p>
<p>第13回テニス学会（平成13年11月） 石川県こまつドーム</p> <p>●日本の選手育成システム</p> <p>梅林薫（大阪体育大学） 田中伸明（東京電機大学） 大島伸洋（トレーニング科学研究所）</p>
<p>第14回テニス学会（平成14年11月） 東京電機大学</p> <p>●日本のテニスを考える－環境、組織、理念、そして指導法について-</p> <p>堀内昌一（亜細亜大学）</p>
<p>第15回テニス学会（平成15年11月） 東京都立短期大学</p> <p>●日本のジュニア選手育成の問題点を探る</p> <p>宮尾英俊（名古屋高校） 笠原康樹（湘南スポーツセンター）</p>
<p>第16回テニス学会（平成16年10月） 白百合女子大学</p> <p>●強くなりたいあなたに贈る 100 ぐらいの法則-トレーニング編-</p> <p>大島伸洋（トレーニング科学研究所）</p>
<p>第17回テニス学会（平成17年9月） リョーコーテニスクラブ</p> <p>●テニスにおける二軸動作について</p> <p>小田伸午（京都大学）</p>
<p>第18回テニス学会（平成18年10月） 羽鳥湖レジーナの森テニスクラブ</p> <p>●テニスにおけるスポーツ科学の貢献-現場にどのような貢献がなされているか-</p> <p>岩嶋孝夫（武蔵工業大学） 道上静香（滋賀大学） 平田大輔（専修大学） 吉田友佳（元プロテニスプレイヤー）</p>

第19回テニス学会（平成19年6月）、第8回テニスフォーラムとの共催 兵庫医科大学

- 講演「コーチングを考える –サッカー協会の試みから–」

講師：田嶋幸三氏（財団法人日本サッカー協会専務理事）

- 「テニスにおけるスポーツ科学の貢献 –その現状と今後に向けて–」

司会：浅沼道成（岩手大学）

井上直子（青山学院大学） 岩嶋孝夫（武蔵工業大学） 道上静香（滋賀大学） 田中伸明（東京電機大学）

第20回テニス学会（平成20年11月） 国立スポーツ科学センター、ナショナルトレーニングセンター

第20回記念大会 『今、テニスでできること』

- 基調講演「生涯スポーツとしてのテニス –そのあるべき姿–」

講師：宮下充正（日本テニス学会会長、東京大学名誉教授）

- 特別講演「今後スポーツが向き合っていくべきこと」

講師：吉田友佳

- 「コーチにとって必要な資質とは」

コーディネーター：西村覚（島根大学）

堀場雅彦（ホリバイインターナショナルテニス） 丸山弘道（吉田記念テニス研修センター）

宮地弘太郎（関西国際大学） 浅沼道成（岩手大学）

- 対談「古武術からの発想：スポーツからロボットまで」

甲野善紀（松聲館） 川副嘉彦（埼玉工業大学）

- 教育講演「JISSにおけるスポーツ科学的サポート」

講師：平野裕一（国立スポーツ科学センター）

第21回テニス学会（平成21年12月） 那覇レクセンター

- 講演「沖縄での生涯スポーツとしてのテニスの普及」

講師：宮下充正（日本テニス学会会長、東京大学名誉教授、首都医校校長）

- シンポジウム「沖縄から世界へ！」

コーディネーター：高橋正則（日本大学）

玉城智（沖縄県テニス協会副理事長） 小高邦子（沖縄県立首里東校等学校）

小島弘之（テニスカレッジ ミュー） 澁谷隆良（東洋英和女学院大学）

- テニスクリニック「沖縄のジュニアを対象とした効果的な指導法」

澁谷隆良（東洋英和女学院大学） 宮地弘太郎（関西国際大学）

第22回テニス学会（平成22年12月） 明治大学和泉キャンパス

- 講演「画像でたどる日本テニス史」

講師：岡田邦子（財団法人日本テニス協会）

- シンポジウム「テニスを科学するとは？」

コーディネーター：高橋仁大（鹿屋体育大学）

前田明（鹿屋体育大学） 関子浩二（筑波大学） 道上静香（滋賀大学）

第23回テニス学会（平成23年12月） 大阪体育大学

<p>●講演「50歳からの健康づくりー生き生きと暮らすためにー」</p> <p>講師：宮下 充正（日本テニス学会会長）</p> <p>●シンポジウム「日本のテニスを世界のトップへ！」</p> <p>コーディネーター：浅沼道成（岩手大学）</p> <p>沢松奈生子（元プロテニスプレーヤー） 宮地弘太郎（関西国際大学）</p> <p>金重徹平（Game Changer） 梅林薫（大阪体育大学）</p>
<p>第24回テニス学会（平成24年12月） 島根大学</p> <p>●シンポジウム「テニスを科学するとは？その2」</p> <p>コーディネーター：高橋仁大（鹿屋体育大学）</p> <p>三浦朗（県立広島大学） 村松憲（慶應義塾大学） 梅林薫（大阪体育大学）</p>
<p>第25回テニス学会（平成25年12月） 日本大学</p> <p>●特別講演「テニスとこころ～11年間のプロ生活で経験したこと～」</p> <p>講師：中村藍子（元プロテニスプレーヤー）</p> <p>●シンポジウム「テニスと心理サポート」</p> <p>関矢寛史（広島大学） 村上貴聡（東京理科大学） 田中伸明（明治大学） 永尾雄一（日本障がい者スポーツ協会）</p>
<p>第26回テニス学会（平成26年12月） 東京理科大学野田キャンパス</p> <p>●特別講演「世界で活躍するには！」</p> <p>講師：遠藤愛（東京経済大学、元プロテニスプレーヤー）</p> <p>●シンポジウム「テニスとソフトテニスの融合の可能性を探る！」</p> <p>高橋正則（日本大学） 石井源信（東京工業大学名誉教授） 緒方貴浩（早稲田大学大学院） 武田守弘（福山平成大学）</p>
<p>第27回テニス学会（平成27年12月） 鹿屋体育大学</p> <p>●特別講演「『スポーツの実践研究』が市民権を得るためになすべきこと」</p> <p>講師：山本正嘉（鹿屋体育大学）</p> <p>●特別講演「鹿屋発！新しいコンセプトの「鹿屋アスリート食堂」の展開」</p> <p>講師：田畑綾美（株式会社オキス・管理栄養士）</p>
<p>第28回テニス学会（平成28年6月） 岩手大学</p> <p>●特別講演「JTA テニス環境等調査から見えてきたこと」</p> <p>講師：澁谷茂樹（笹川スポーツ財団）</p> <p>●シンポジウム「日本のテニス環境を考える」</p> <p>浅沼道成（岩手大学） 西村 覚（島根大学） 富岡好平（エストテニスクラブ） 澁谷茂樹（笹川スポーツ財団）</p>
<p>第29回テニス学会（平成29年12月） 慶應義塾大学</p> <p>●特別講演「テニスで学ぶ術」</p> <p>講師：植田 実（日本テニス協会強化本部本部長）</p> <p>●シンポジウム「データ活用最前線」</p> <p>三橋大輔（筑波大学） 池田 亮（日本テニス協会強化本部） 坂井利彰（慶應義塾大学）</p> <p>植田 実（日本テニス協会強化本部本部長）</p>

第30回テニス学会（平成30年6月） 専修大学

●特別講演「プロ野球で生き抜くために必要な事-Be Ready-」

講師：鈴木尚広(元読売ジャイアンツ・野球解説者)

●シンポジウム「目指すべきよい指導とは？：それぞれの現場の How to Coach」

伊藤雅充（日本体育大学） 中嶋康博（VIP・TOP インドアテニススクール）横松尚志（日本テニス協会）

宮地弘太郎（大阪体育大学）齋田悟司（株式会社シグマックス 2004年アテネパラリンピック金メダル）

●企画セミナー「心理カウンセラーから学ぶ話の聴き方・話し方」

金子玲子（専修大学／大学カウンセラー・臨床心理士）

●オンコートセミナー「ソフトテニス講習会」

篠原秀典（日本体育大学） 小林幸司（ミズノ）

第31回テニス学会（令和元年6月） びわこ成蹊スポーツ大学

●特別講演「国内国際大会の必要性について」

講師：堀内昌一(亜細亜大学)

●特別講演「日本卓球協会のこれまでの取り組みについて」

講師：前原正浩(（公財）日本卓球協会副会長)

●パネルディスカッション「これからのコーチに求められるコーチングスキルについて」

伊藤リナ（（公財）日本オリンピック委員会ナショナルコーチアカデミーアシスタントディレクター）

前原正浩(（公財）日本卓球協会副会長)

第32回テニス学会（令和2年6月） 北翔大学

新型コロナウイルス感染拡大のため中止

第33回テニス学会（令和3年9月） ウェブ開催

● レクチャー 「映像で見るテニスの歴史」

講師：後藤光将（明治大学）

● シンポジウム 「テニス競技を支えるスポーツ科学」

魚田尚吾（関西大学） 黒田裕太（北翔大学）高橋正則（日本大学） 進行：村上俊祐（鹿屋体育大学）

第34回テニス学会（令和4年10月） 北翔大学

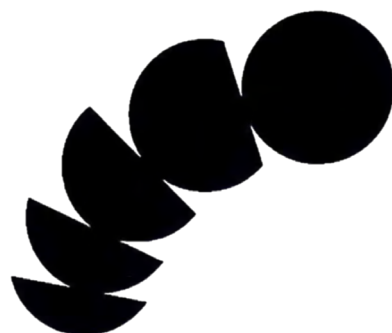
●特別講演「これまでのテニス学会とこれから」

講師：梅林薫(大阪体育大学)

●特別講演「テニピンがテニスのミライを創造する」

講師：今井茂樹(山梨学院短期大学)

テニス大会歴代優勝者



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

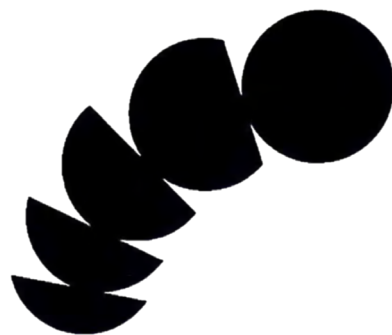
日本テニス学会 テニス大会 歴代優勝者

		Aクラス	Bクラス	45歳以上
第1回 1989	東京大学教養学部	大島伸洋 村本茂樹	浅沼道成 久保田秀明	
第2回 1990	東京大学教養学部	大森 豊 大森 肇	風間洋一 一瀬郁夫	
第3回 1991	大阪体育大学	高橋正則 村松 憲	前島芳雄 吉永裕樹	
第4回 1992	吉田記念 テニス研修センター	三浦 朗 前島芳雄	杉山貴義 水落文夫	小山秀哉 藤井恒夫
第5回 1993	大阪体育大学	足立長彦 大島伸洋	山内 武 串間敦朗	深見和男 平田 聰
第6回 1994	広島経済大学	雨天のため中止		
第7回 1995	スポーツ 医・科学研究所	宮尾英俊 佐藤陽治	西本整一 岩垂隆成	川副嘉彦 渡辺保雄
第8回 1996	長岡市市民体育館	村松 憲 康永哲守	平田 聰 平田大輔	小山秀哉 平田 聰
第9回 1997	専修大学	佐藤雅幸 小島京子		
第10回 1998	岩木山 総合公園体育館	藤原昌樹 石光孝次		池田耕吉 斉藤静夫
第11回 1999	白百合女子大学	*		
第12回 2000	職業能力開発 総合大学校	*		
第13回 2001	こまつドーム	*		
第14回 2002	東京電機大学	周東真理 村松 憲	コンソレ 川副嘉彦	
第15回 2003	東京都立短期大学 有明テニスの森公園	水野忠知 鈴木誠		
第16回 2004	白百合女子大学	荒天のため中止		
第17回 2005	リョーコーテニスクラブ	平田 聰 平田大輔		
第18回 2006	羽鳥湖レジーナの森 テニスクラブ	Aクラス	Bクラス	
		佐藤雅幸 佐藤周平	大山 肇 水野忠知	
第19回 2007	兵庫医科大学	池田耕吉 宮嶋慎治		
第20回 2008	ナショナルトレーニングセンター	チーム対抗戦 星美輝 石井誠 望月賢 池田耕吉 高橋博 川田祐也 森雅子		
第21回 2009	那覇レクセンター	山田龍彦 村上貴聡		

* は不明

		優勝	準優勝	3位
第22回 2010	明治大学	茨木千恵子	澁谷隆良	
第23回 2011	大阪体育大学	武田守弘	森雅子	霜島広樹
第24回 2012	島根大学	池田耕吉	平田聰	山本浩之 村上俊祐
第25回 2013	日本大学	佐藤茂 関矢寛史	神藤隆志 佐野左近	村上俊祐
第26回 2014	東京理科大学	池田耕吉 村上俊祐	黒田裕太 阪田俊輔	平田聰 高橋仁大
第27回 2015	鹿屋体育大学	粥川捺美	山本浩之	西島吉典
第28回 2016	岩手大学	平田 聰 北崎悦子	村上弘平 吉岡瑠維	
第29回 2017	慶應義塾大学	森嶋 修	北崎悦子	
第30回 2018	専修大学	板橋クリスト ファーマリオ 岩本 淳	村松 憲	
第31回 2019	びわこ成蹊スポーツ大学	西坂正雄 発田志音	箸本涼真 山中千紘	
第32回 2020	北翔大学	新型コロナウイルス感染拡大のため中止		
第33回 2021	Web開催	Web開催によりテニス大会不開催		
第34回 2022	北翔大学 雨天により屋内でのテニピン ダブルスマッチで開催	孫国棟 山中海斗	高橋仁大 セントロウ	

研究奨励賞歴代受賞者



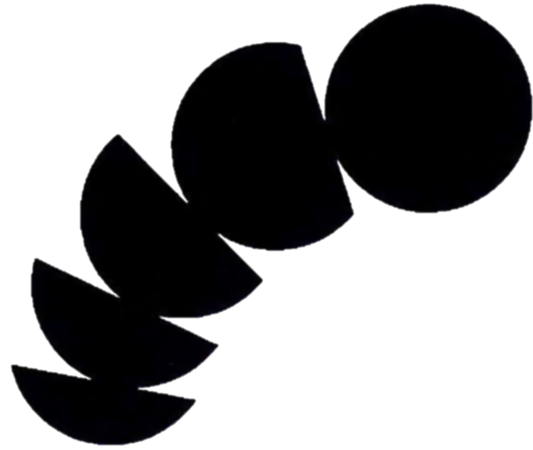
JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

日本テニス学会 研究奨励賞 歴代受賞者

第1回 平成/10 東京大学教養学部	三浦 朗 東北大学	テニス選手の位置検出システム
第2回 平成2/09 東京大学教養学部	三宅 眞理 大阪教育大学	ジュニアの発育発達とショートテニス
第3回 平成3/10 大阪体育大学	大島 伸洋 中京大学	過去の運動クラブ経験がテニスの技術レベルに及ぼす影響
第4回 平成4/09 吉田記念テニス研修センター	高橋 正則 日本大学大学院	グランド・ストロークにおけるコースと球種の予測のための認知的技能について
第5回 平成5/11 大阪体育大学	三橋 大輔 筑波大学	一流テニス選手における大腿筋群の形態的特徴
第6回 平成6/09 広島経済大学 兼 第1回アジアテニス医・科学会議	ANNA.P.SKORODOUMOVA Russian State Academy of the Physical Culture	Loads in Competition
第7回 平成7/12 スポーツ医・科学研究所	田中 伸明 慶應義塾大学	大学テニスプレイヤーの集中力と競技力との関係
第8回 平成8/11 長岡市市民体育館	田辺 智 吉田記念テニス研修センター	テニス・サービスにおける上肢関節運動について
第9回 平成9/11 専修大学	鈴木 隆宏 テニスクリエーション	サービススイングにおける回旋動作へ導入するための練習方法の紹介
第10回 平成10/09 岩木山総合公園	道上 静香 筑波大学	世界一流選手のフォアハンド・ストロークについて -コース打ち分けの技術について-
第11回 平成11/11 白百合女子大学	高橋 仁大 鹿屋体育大学	世界トップ選手のダブルスのゲーム分析
第12回 平成12/11 職業能力開発総合大学校	平田 大輔 日本体育大学	テニスの学習に伴う認知的技能の変容に関する研究 -初心者について-
第13回 平成13/11 こまつドーム	有村 純太郎 鹿屋体育大学大学院	ビデオ機器を導入した練習法の開発
第14回 平成14/11 東京電機大学	武田 守弘 広島大学大学院	テニスのサービス予測に関する調査 -状況に基づく予測に着目して-
第15回 平成15/11 東京都立短期大学 有明テニスの森公園	徳田 寛子 岩手県テニス協会トレーニングセンター	テニスプレイヤーの経験年数と戦績によるフローの感覚差について
第16回 平成16/10 白百合女子大学	受賞資格対象者無	
第17回 平成17/9 リョーコーテニスクラブ	櫻井 真之介 日本大学大学院	コース予測のためのパターン認知のトレーニングがパフォーマンスに与える影響 -ソフトテニスのネットプレーを対象として-
第18回 平成18/10 羽島湖高原 レジーナの森テニスクラブ	佐藤 周平 東海大学大学院	テニスのサーブにおける模擬動作（フォーム）と実打との比較検討
第19回 平成19/6 兵庫医科大学 兼 第8回テニスフォーラム	宮地 弘太郎 関西国際大学	ラリーの主導権を握るためのショットに関する研究
第20回 平成20/11 国立スポーツ科学センター ナショナルトレーニングセンター	九鬼 まどか 早稲田大学大学院	クロススタンス打法によるフォアハンドストロークのキネマティクス
第21回 平成21/12 那覇レクセンター	岩月 猛泰 日本大学大学院	世界一流選手の対戦におけるサーフェスの違いからみたゲーム分析
第22回 平成22/12 明治大学	該当者無	
第23回 平成23/12 大阪体育大学	霜島 広樹 早稲田大学	テニス参加動機が観戦意図へ与える影響に関する研究
第24回 平成24/12 鳥根大学	村田 宗紀 筑波大学大学院	硬式テニスサーブにおける肩関節内旋トルクと上腕の角加速度の関係
第25回 平成25/12 日本大学	野田 霞 グリーンヒルズインドアテニススクール	低年齢初心者における異種用具（低反発ボール）を活用した ストローク練習のアイデア -PLAY+STAYへの移行を想定したゴムボールの活用-

第26回 平成26/12 東京理科大学	大塚絵梨奈 筑波大学大学院	テニスサーブにおけるトスに関するバイオメカニクス的研究 - トスのばらつきに着目して -
第27回 平成27/12 鹿屋体育大学	佐久間智央 九州工業大学大学院	ソフトテニス競技における自己効力感および他者効力感とパフォーマンスの関係
	石原暢 北海道大学大学院	青年テニスプレーヤーにおけるシングルスゲーム前後の認知機能の変化と競技パフォーマンスの関係
第28回 平成28/6 岩手大学	野沢絵梨 慶応義塾大学大学院	ライフスキルと集団凝集正がテニスの競技力に及ぼす影響 - 大学体育会テニス部員を対象にして -
	黒田裕太 北翔大学	高強度活動後のグラウンドストローク精度の改良を目的とした練習方法の提案
第29回 平成29/12 慶応義塾大学	生関文翔 安田女子短期大学	テニスのリズム系ダンスにおける良い動きの獲得と指導法の共通性について
	北崎悦子 筑波大学大学院	テニスのラリーにおける個人戦術の指導の実践知に関する事例的研究 国際レベルで活躍した元女子テニス選手を指導したコーチの語りを手がかりに
第30回 平成30/6 専修大学	村上俊祐 鹿屋体育大学	日本トップテニス選手のグラウンドストロークにおける打球分析：コースとポジションの違いに着目して
	発田志音 東京大学教育学部付属中等教育学校	テニス審判員の参加動機と満足度に関する調査：活躍頻度向上に関する提言
第31回 令和元/6 びわこ成蹊スポーツ 大学	箸本涼真 金沢大学	学校体育・部活動とテニスアカデミーのよりよいつながりを探して：アデレードの事例から学ぶ
	山本衛 東京弁護士会	テニス中の事故に伴う法的責任と現場の対応
第32回 令和2/6 北翔大学	新型コロナウイルス感染拡大のため中止	
第33回 令和3/9 Web開催	田島勇人 日本大学大学院	大学テニス選手の心理的競技能力とコンディショニングに対する意識がスポーツ傷害に与える影響
第34回 令和4/10 北翔大学	川本裕大 東京大学	グラウンドストロークにおいて身体全体を打撃方向に大きく移動させるという教示がラケットスピードに与える影響

MEMO



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

第 35 回テニス学会事務局

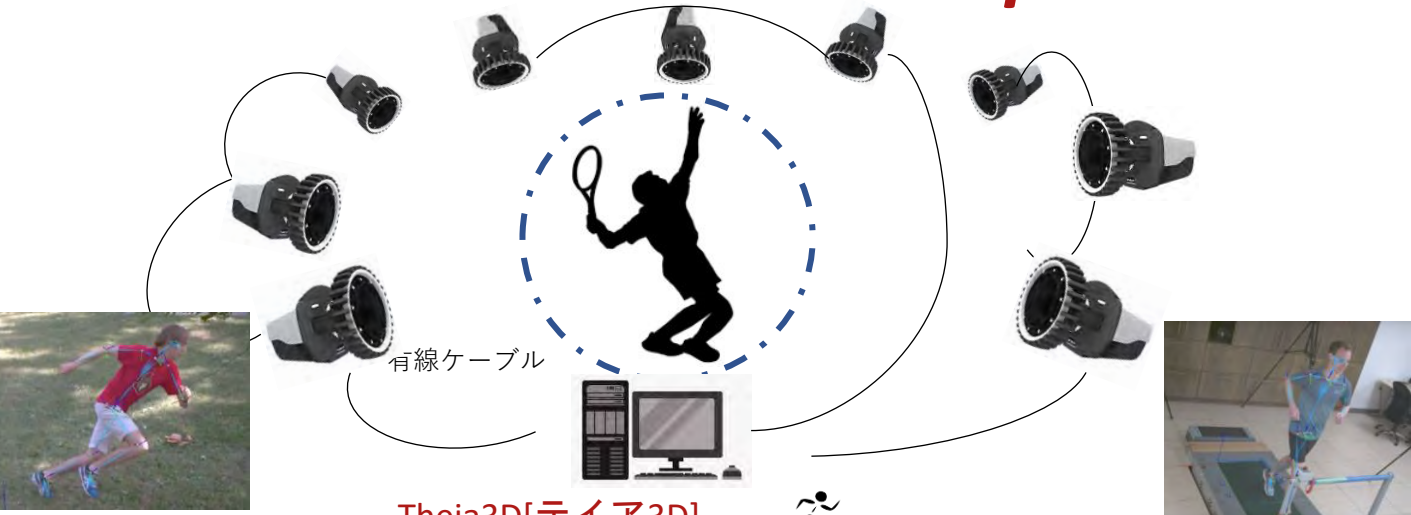
大同大学

〒457-8530 名古屋市南区滝春町 10-3

スタッフ

小屋 菜穂子 (大同大学 教養部保健体育教室 准教授)

Markerless Motion Capture



FEATURE

- ◆どんな場所でも
- ◆普段着のまま
- ◆一切のマーキングなし
- ◆ワンクリック操作
- ◆簡単空間校正
- ◆自動AIラベリング
- ◆マルチ被験者識別取得
- ◆複数台同期カメラ
- ◆Qualisysカメラ

Theia3D[ティア3D]

THEIA社製マーカーレスモーションキャプチャーTheia[ティア]は、マルチビデオを利用した動作分析ソフトウェアです。

Theiaは、その名の通りギリシャ神話において太陽神を産んだ女神ティアのごとく、モーションキャプチャー界に新たな光をもたらすマーカーレス技術を提供します。

マーカーレス技術

従来のモーションキャプチャーでは、被験者はぴったりした服と、訓練を受けたオペレーターが適用しなければならない多数の反射マーカーを着用する必要があります。

Theiaマーカーレスには一切のマーキングを必要とせず、普段の練習着やユニフォームのまま即座にご利用頂けます。



Markerless Motion Capture

Wireless EMG NORAXON

Superior Evidence-Based Biomechanics



中周波 微弱電流治療器 NEUBOXII ニューボックスII

Transcutaneous Electrotherapeutic Stimulator

テニス肘に！



[問合せ先] 株式会社プレシャスワーク
 URL: <https://preciouswork.jp>
 担当: 大井稔 PH:090-6068-7382
 担当: 吉野智昭 PH:090-1330-9420
 Email: ooi@preciouswork.jp Email: yoshino@preciouswork.jp





スクール生募集中!

詳しくはお近くの
テニススクール・ノアまで!



初心者対象! 冷暖房完備のインドアテニススクール テニススクール・ノア

東海地方初! 新規オープン続々! 都内3校目!

2023年10月

名古屋瓢箪山校

スクール生
募集中!

2024年7月

南町田校(東京都 町田市)

大阪府

大阪南千里校

住所 吹田市千里山竹園2-17-35
TEL 06-6310-8046

大阪深江橋校

住所 大阪市城東区轟訪4丁目1-23
TEL 06-6965-1035

大阪都島校

住所 大阪市都島区友洲町2-10-21
TEL 06-6167-6152

大阪茨木校

住所 茨木市三島丘1丁目6-1
TEL 072-646-9991

大阪通天閣前校

住所 大阪市浪速区恵美須西2-1-24
TEL 06-6633-7020

大阪横堤校

住所 大阪府大阪市鶴見区横堤5-6-37
TEL 06-6913-8390

大阪久宝寺校

住所 大阪府八尾市龍華町2-2-2
TEL 072-990-0082

大阪天下茶屋校

住所 大阪市西成区岸里1-1-40
TEL 06-6652-7248

大阪池田校

住所 大阪府池田市鉢塚2-9-15
TEL 072-737-7329

大阪阿波座校

住所 大阪府大阪市西区立売堀6丁目7番18号
TEL 06-6450-8552

東京都

国分寺校

住所 国分寺市本多2丁目13
TEL 042-300-4515

世田谷桜新町校

住所 東京都世田谷区弦巻4-12-3
TEL 03-6432-6660

埼玉県

武蔵浦和校

住所 さいたま市南区白幡5-14-7
TEL 048-866-3432

和光成増校

住所 和光市白子2-25-2
TEL 048-451-0603

神奈川県

川崎宮前平校

住所 神奈川県川崎市宮前区土橋1-1-6
TEL 044-920-9788

横浜東戸塚校

住所 横浜市港南区下永谷6丁目2番11号
TEL 045-443-9621

川崎溝の口校

住所 川崎市高津区溝口1-6-12 リンクス溝の口5階
TEL 044-455-4305

横浜綱島校

住所 横浜市港北区綱島東5-27-9
TEL 045-541-6033

横浜センター南校

住所 横浜市中区磯子区磯中央1-2センター南駅ビル5F
TEL 045-482-7920

横浜井土ヶ谷校

住所 横浜市中区井土ヶ谷中町158番
アクロスキューブ井土ヶ谷5階
TEL 045-315-6960

兵庫県

姫路校

住所 兵庫県姫路市八家1272
TEL 079-246-3111

姫路青山ブルーマウント校

住所 姫路市青山2-1-1
TEL 079-266-2097

加古川校

住所 加古川市米田町船頭113-1
TEL 079-434-2244

西宮校

住所 西宮市鳴尾浜1-1-3
TEL 0798-46-7888

HAT神戸校

住所 神戸市中央区脇浜海岸通2-2-3
TEL 078-252-2585

宝塚伊丹校

住所 宝塚市安倉西3-8-15
TEL 0797-81-7888

神戸名谷校

住所 神戸市垂水区名谷町48
TEL 078-704-3233

尼崎塚口校

住所 兵庫県尼崎市南塚口町5丁目17番52号
TEL 06-6423-9744

神戸御影校

住所 神戸市東灘区御影本町4丁目4-1
TEL 078-200-6920

岡山県

倉敷校

住所 岡山県倉敷市平田615番地1
TEL 086-430-0400

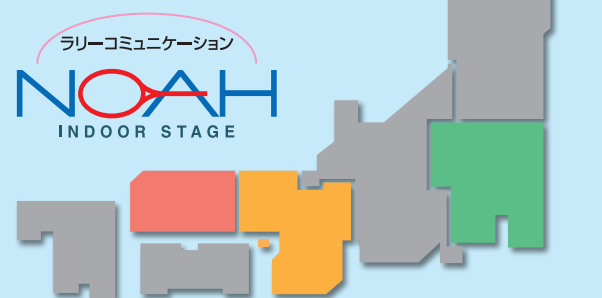
岡山校

住所 岡山市南区下中野1407-1
TEL 086-243-6522

京都府

京都西校

住所 京都市右京区西京極町ノ坪町24
TEL 075-326-4611

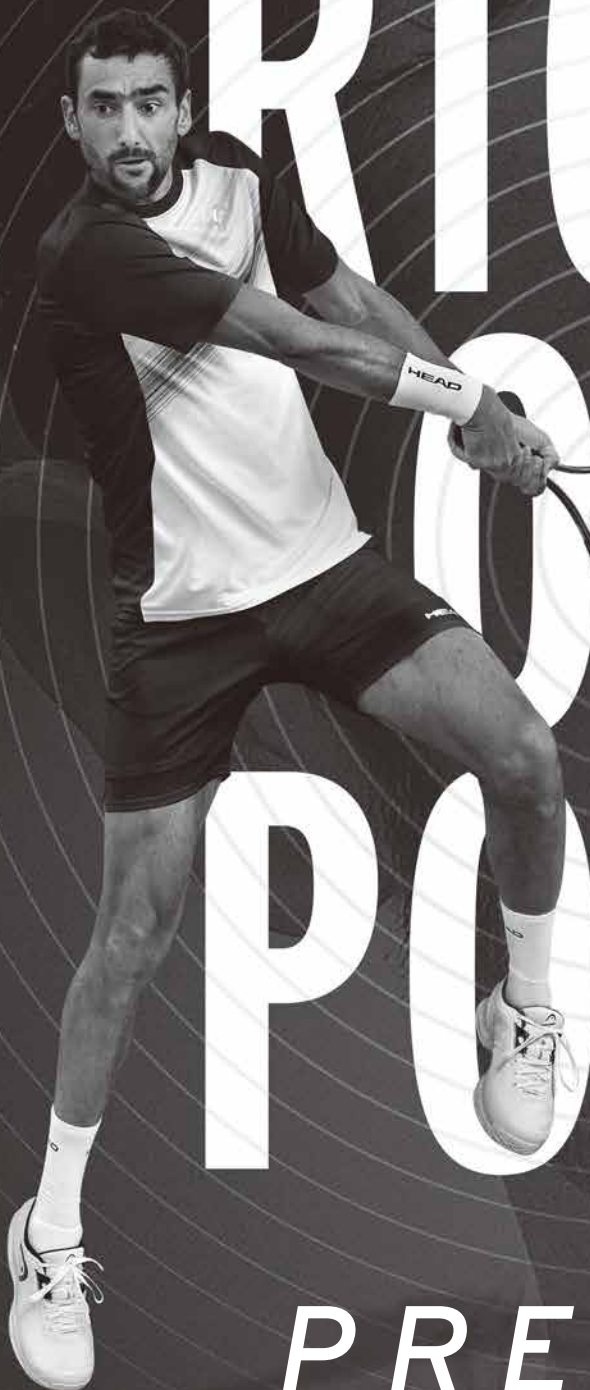


フリーコミュニケーション
NOAH
INDOOR STAGE

全国30校以上、会員数35000人以上!ノアには安心と信頼があります!



RIGHT ON POINT



PRESTIGE

これほどプレイヤーに忠実なラケットはない。
伝説は続く。



HEAD[®]
.COM/PRESTIGE



REACH BEYOND



MIZUNO TENNIS

*I know who I am.
Do you?
Zero Daniel*



ミズノブランドアンバサダー(シューズ&アパレル契約)
ダニエル太郎(エイブル)

飛躍するスピード
WAVE EXCEED TOUR 5

ウェーブエクシード ツアー5 [61GA227012]
¥17,600(本体価格¥16,000) / サイズ 22.5~30.0cm

jpn.mizuno.com 0120-320-799



中学2年生の私、今思えばとても不器用で、
自分のキモチをうまく言葉にできなかった。
ある時、友達の手をずつつかんでいたことがあった。
何を話したかは忘れてけれど、
ただ、笑い返してくれた友達の優しい顔と
腕の温かさだけは今も忘れない。
その友達は今日も隣で笑ってくれている。
「私たち親友だよ」って言い合いながら。

だれかとつながる。ともに生きる。



東海学園大学

YOKAI GAKUIN
UNIVERSITY



経営学部 | 人文学部 | 心理学部 | 教育学部 | スポーツ健康科学部 | 健康栄養学部